

# 道の道を歩く

尾崎秀樹

評論家

日本ペンクラブ専務理事

On the Great Path of History

Hotsuki OZAKI

Critic

Executive Director, The Japan P. E. N. Club

中国の作家・魯迅に次の言葉がある。

「地上にはもともと道はない。歩く人が多くなれば、それが道となる」

これは魯迅みずからの歩んだ人生の道をも語っている。魯迅が生まれた当時、中国は社会的にも思想的にも閉ざされていた。その状態をくぐり抜け、いくつかの壁をのりこえて、魯迅は歩みつけた。そして彼の歩んだ軌跡が、道となり、やがて大道となって人々を導いたのである。

私は歴史の道がすきで、むかしから機会があるごとに歩いてきた。テレビや旅の雑誌の依頼によることもあったが、みずから思い立って旅したこともある。東海道や中山道はもちろん、奥の細道行脚も車を利用して、点と線の旅をつづけた。太平洋の船の旅もやったし、シベリア鉄道の旅も途中まで果した。長江の三峡下りもしたし、おきまりのロマンチック街道やメルヘン街道も車や汽車をのりついで走った。そのたびに実感するのは、「歩く人が多くなれば、それが道となる」という魯迅の言葉だ。

新選組の足跡をもとめて、多摩から京・大坂へ、甲州から流山、宇都宮を経て会津・函館とまわったこともあったし、義経伝説の跡をたずねて、高館から三陸沿岸を北上し、三厩から津軽海峡をわたり、日高の地まで入ったこともある。義経主従が蝦夷地に渡ったという伝承は、ふるくからあるが、おそらく奥州浄瑠璃の語り手たちが、「御曹子島渡り」を語りながら歩いた道が、いつか義経たち自身のコースと化し、虚構の道を実在化していったにちがいない。高野聖たちが各地を遍歴し、弘法説話をひろめて行き、それがまた伝承となっていったのと類似している。

私は関ヶ原の西を流れる藤古川のほとりに立って、往古から現代までのいくつにも重層された道を眺めることがある。不破関跡から流れの方へ下っていったあたりからの景観だ。北を眺めると国道21号線が頭上を走り、その先に東海道本線が見られる。南は藤古川の流れの先に新幹線、そして高速道路が走っている。これらの道がやがて一つに集中し、山ふところにすいこまれてゆくさまは、いかにも象徴的に映る。

関ヶ原といえば慶長5年(1600)秋に徳川家康と石田三成の間に戦われた合戦の主戦場として有名だが、それより930年ほど前の弘文1年(672)夏にも、天下を二分する大きな戦いが関ヶ原で行われた。天智天皇の弟にあたる大海人皇子(のちの天武帝)と子どもの大友皇子(弘文帝)との皇位をめぐる争いだ。いわゆる壬申の乱である。不破関はその壬申の乱の翌年に開かれ110年にわたってつづいた日本三関の1つだった。

関ヶ原は中山道、伊勢街道、北国脇往還が一つに落合う宿駅の1つでもあった。私は古来からの道がいくつにも交差する関ヶ原の一角に立って、ふるくから現代に到る人たちの道行く姿を、いろいろに思いめぐらす。私が道にひかれるのは、そこに人々の歴史のドラマが重なるからでもあるのだ。

原稿受理 1989年7月27日